

## 第2学年 生活科 学習指導案

附属小学校  
中尾 鈴

### 1. 題材 野菜や果物を売る山本さんのしごと

### 2. 目標

- 商店は、品物をつくる人たちとそれを使う人たちとの間にたって、品物の売り買いをしやすくするはたらきがあることをわからせる。(商店の機能) (知識及び技能)
- 良い野菜や果物を買う人たちに届けようとしている山本さんの願いやくふうについて気づかせる。(八百屋さんとしての専門性) (思考力・判断力・表現力)
- 山本さんの話を聞きながらメモを取り八百屋さんのしごとについて自分の考えをもたせる。(主体的に学習に取り組む態度)

### 3. 題材について

#### ○本題材の価値

山本食料品店の野菜や果物は本校の給食に取り入れられている。複雑で見えにくい行程を経て学校にやってくる野菜や果物は2年生にとっては理解しにくいですが、本題材で取り上げる山本さんの仕事は直接話が聞けることと実際の商品が見学できることは子どもにとってもわかりやすい。これまでも、2年生活科の教材として山本食料品店を取り上げて、授業づくりを進めてきたが、子どもたちにとって「仕事が聞ける・見えること」は大きな学びである。そして、さらに自分たちの給食に取り入れられている野菜や果物ということで、それがどのようにして運ばれてくるのか、選ばれているのかを知りたいという子どもの学ぶ要求や、学ぶ意味も大きい。

良い野菜や果物を選ぶために大切にしていることが山本さんにはたくさんある。その一つが産地である。ある野菜一つでも季節によって仕入れる産地を毎度変えていること。(例えば玉ねぎだと、春は淡路島産だが、冬は北海道産のものを仕入れている。) また、産地のみならず美味しかった野菜や果物を作った生産者の名前もよくメモをして覚えていること。常に八百屋仲間と情報交換し野菜や果物の勉強を怠らないことも大事にされている。また何ととっても、この道65年の経験から「どれがおいしい野菜か」見分けられる目を持っていらっしやること。色や形に注目して山本さんの専門性をもって選ばれた野菜に信頼を置き、遠くから買いに来てくださるお客さんもいる。

#### ○子どもについて

本学級の子どもたちは、給食が大好きである。毎日、「今日の献立は何か」と楽しみにしている子どもも多い。本校は自校方式の給食であり、食材にもこだわっている。奈良県産の食材を取り入れながら、手作りの給食を大事にしている。「おいしい！」と感想をもらす子どもたちも多い。毎日当たり前のように出る「おいしい」給食の食材がどうやって学校に届いているのかは、子どもたちにとって見えにくいところである。特に子どもたちにとって八百屋さんのイメージは「自分たちで作ったもの売っている」という認識が強い。山本さんが朝早くから市場に行き全国から集まった数ある野菜や果物の中から厳選して食材を選んでいること、生産者と消費者をつなぐ役割を担っていることを丁寧に事前学習も行いながら深めていきたい。また、「八百屋さん＝店頭での販売が主な仕

事」と思っている子どもも多い。山本さんのお話から「仕分け」「配達」にもかなりの時間をかけていることに気づかせたい。

子どもたちは1年の生活科で、学校ではたらく人と家庭ではたらく人に焦点を当ててきた。子どもたち自身の生活が周りの人たちの「しごと」によって支えられていること、また家事労働には、おうちの人の願いや工夫があることを学んできた。本題材の山本さんのしごとにも、同じように願いや工夫がある。1年での学習を土台にしながら、願いや工夫、こだわりに迫っていかせたい。

## ○どのように教えるか

### ①給食に出ている野菜や果物がどこからきているかを学ぶ。

そのためにまず、自分のおうちでは野菜・果物などはどのようにして手に入れているのかを思い出す。ほとんどの場合はスーパーマーケットで買っている。消費者と商店を板書して関係を図で示す。「売る」「買う」という言葉も板書する。「直接、野菜や果物を育てている農家を訪ねて買っているのか？」問う。直接取引しないことを確認する。なぜ直接農家に買いに行かないかを考える。子どもの声「店で売っているから。」「邪魔くさいから。」「近くにないから」「遠いから」など。

消費者（自分たち）と生産者（野菜や果物を作る農家）の間に店があることを確認する。なかなか思いつかない場合は、涼しい地方で採れるリンゴとあたたかい地方で採れるみかんが店にあることによってどちらも手に入ることなど、消費者が直接生産地を訪ねなくても、いろいろな品物が手に入ることに気づかせる。リンゴを買いに直接青森まで行くと、電車で〇万円かかり、ミカンを買いに熊本まで行くと〇万円必要などと、具体的に語る。様々な地域の品物が手に入れることができるのが商店の役割である。商品の動きとお金の動きが反対になっていることにも板書で図示することで気づかせる。スーパーマーケットの大きいものでも役割は同じことにふれておく。

### ②山本食料品店から野菜や果物を買っているのはなぜか。

附小の給食の野菜を山本食料品店から買っているわけを考える。子どもたちの家庭で品物を買うときにそのお店にするわけを考えさせ、山本商店から買う理由を予想する。考えられる理由「近い。」「良い品物がおいてある。」「店員が親切。」など。栄養士の阪口先生の理由は「山本さんが野菜や果物のことをいろいろとよく知っているから。」と伝える。山本さんは野菜や果物についてどんなことをよく知っているのか予想する。

### ③山本さんに聞いてみる。

自分なりの予想を持って見学する。山本さんの一日の仕事、大変なこと、嬉しいこと、野菜と果物のおいしいものを見分け方、具体的にまずはこちら側で質問し答えてもらう。その他自由な質問を後に行う。

## ○ESDとの関連

### ○この題材で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

#### ・ 相互性

自分たちが普段給食で口にしている野菜や果物は、全国から市場に集まったものであり、さらにそこから山本さんがこだわって選んだものが運ばれてきて使われている。

○この学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・ 多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）

八百屋さんは直接農家のところまで買いに行っているのではなく、全国から集まってくる野菜や果物を市場で専門的な知識や経験を活かしながらこだわって選び、買っていること。野菜を売ることだけがしごとではなく、配達もしごとに含まれていること。新種の野菜も市場には並ぶので日々八百屋仲間と今もこれからも勉強をし続けていること。

○この学習を通して育てたい ESD の価値観

- ・ 幸福感に敏感になる。幸福感を重視する。

何気なく口にしてきた給食の野菜や果物には、山本さんのこだわりや思いが込められていたことに気づく。

- ・ 達成が期待される SDG s

12 生産と消費

#### 4. 評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に取り組む態度
①山本さんは仕入れ・仕分け・配達・販売までをしていることがわかっている。	①野菜や果物を売る山本さんのしごとについて考えている。	①どのようにしておいしい野菜や果物が選ばれて運ばれてくるかを知ろうとする意識をもち、意欲的に見たり、聞いたりしようとしている。
②見たり、聞いたりして得た知識を、ことばや絵などでまとめている。	②しごとについて学んだことや考えたことをことばや絵でなかまに伝えている。	②山本さんのこだわりを知り、自分たちが口にする食材に興味を持っている。

#### 5. 指導計画（全4時間）

学習活動	指導上の留意点	評価備考
1. お店のはたらき ・消費者（自分たち）と生産者（野菜や果物を作る農家）の間に店があることを学ぶ。	○「直接、野菜や果物を育てている農家を訪ねて買っているのか？」問う。 ○、消費者が直接生産地を訪ねなくても、いろいろな品物が手に入ることに気づかせる。	イ①

<p>2. 山本食料品店から野菜や果物を買っているのはなぜか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・附小の給食の野菜を山本食料品店から買っているわけを考える。</li> </ul>	<p>○子どもたちの家庭で品物を買うときにそのお店にするわけを考えさせ、山本商店から買う理由を予想させる。</p>	<p>ウ① ウ②</p>
<p>3. 山本さんに聞く</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・山本さんの一日の仕事、大変なこと、嬉しいこと、野菜と果物のおいしいもの見分け方を見聞きする。</li> </ul>	<p>○山本さんの話を聞いて、さらにわからないことがあれば、質問をさせる。</p>	<p>ア① ア②</p>
<p>4. 学習のふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・わかったことを出し合う。</li> </ul>		<p>イ②</p>